
戦後日本の米軍基地における子供のアイデンティティ形成
—岩国基地と立川基地の子供に着目して—

Identity formation of children on US military bases in Japan after
WWII:

Focusing on children at Iwakuni and Tachikawa bases

تشكل هوية الأطفال في القواعد العسكرية الأمريكية في اليابان بعد الحرب
العالمية الثانية:

بالتركيز على أطفال قاعدتي إيواكوني وتاتشيكاوا

د. نيرمين عز الدين منصور (*)

Abstract

This study focuses on the identity formation of Japanese children raised in the vicinities of two U.S. military bases: Iwakuni in Yamaguchi Prefecture and Tachikawa in Tokyo. Unlike children in other regions, those in base-adjacent communities experienced daily exposure to the presence of U.S. military personnel, facilities, and activities. By analyzing their writings, such as essays and diaries, this paper examines how these children navigated the complexities of cultural hybridity, national belonging, and personal identity.

Following Japan's acceptance of the Potsdam Declaration in August 1945, the country underwent a sweeping transformation under the Allied occupation, particularly in its political, social, and educational systems. The Japanese government was compelled to shift its national identity from that of a militaristic empire to a peaceful democracy, with American cultural and educational influences deeply embedded in postwar reforms. Among the most affected were Japanese children growing up near U.S. military bases, where American education models and values were introduced.

(*) مدرس بقسم اللغة اليابانية وآدابها، كلية الآداب — جامعة القاهرة.

Through these narratives, the research reveals how the children's sense of self was shaped by their experiences of living between Japanese society and American military culture. It argues that postwar communities like Iwakuni were not merely sites of cultural convergence but dynamic spaces where diverse social and ethnic interactions, along with problems caused by the military bases, played a critical role in shaping identity. This study thus highlights the nuanced and multifaceted experiences of so-called "children of the bases" in postwar Japan.

المستخلص:

يركز هذا البحث على تشكل الهوية لدى الأطفال اليابانيين الذين نشأوا بالقرب من قاعدتين عسكريتين أمريكيتين: إيواكوني في محافظة ياماغوتشي وتاتشيكاوا في طوكيو. بخلاف الأطفال في مناطق أخرى، كان هؤلاء الأطفال على احتكاك يومي مباشر مع الوجود العسكري الأمريكي، من أفراد ومنشآت وأنشطة عسكرية. من خلال تحليل كتاباتهم مثل المقالات واليوميات، تستعرض الدراسة كيف تعامل هؤلاء الأطفال مع تعقيدات التهجين الثقافي والانتماء الوطني وتشكيل الهوية الشخصية.

تأثر الأطفال بالمشاكل ذات الطبيعة الخاصة جداً التي يشاهدونها في حياتهم اليومية في القاعدة، وقد شكلت هذه التجارب هويتهم بشكل لم يسمح لهم أن يعيشوا حياة أطفال طبيعيين، بل أصبحوا أكثر مسؤولية حتى يستطيعوا التواءم مع البيئة المحيطة.

عقب قبول اليابان لإعلان بوتسدام في أغسطس 1945، خضعت البلاد لتحول جذري تحت الاحتلال الأمريكي، خاصة في أنظمتها السياسية والاجتماعية والتعليمية، حيث طبقت نماذج وقيم أمريكية في التعليم والحياة العامة. وكان الأطفال الذين نشأوا بجوار القواعد الأمريكية من بين الأكثر تأثراً بهذه التغيرات.

تكشف وثائق الروايات الشخصية التي كتبها الأطفال، والتي جمعت بعد الحرب في مؤلفات مثل "أطفال القواعد" و"سوناجاوا"، عن كيفية تشكل هوياتهم نتيجة العيش في بيئة تتقاطع فيها الثقافة اليابانية مع الثقافة العسكرية الأمريكية. وتُظهر هذه الشهادات أن مجتمعات ما بعد الحرب، مثل تلك المحيطة بقاعدتي إيواكوني وتاتشيكاوا، لم تكن مجرد نقاط التقاء بين ثقافتين، بل فضاءات ديناميكية ومعقدة شهدت تفاعلات اجتماعية وعرقية متعددة، رافقها العديد من التحديات والمشاكل الناتجة عن وجود القواعد العسكرية. ومن خلال ذلك، تسلط الدراسة الضوء على التجارب الغنية والمركبة لما يُعرف بـ "أطفال القواعد" في اليابان خلال مرحلة ما بعد الحرب.

1. はじめに

本稿は、岩国米軍基地や立川米軍基地¹で育ち、社会的にも文化的にも岩国とアメリカの狭間に位置する「米軍基地の子供」のアイデンティティ形成過程を明らかにすることを目的としている。彼らの日々の経験、米軍基地の好き嫌い感、そして所属意識がどのようにアイデンティティ形成に関連しているかを考察し、戦後の岩国社会が単なる文化の融合にとどまらず、アジアからの基地労働者を含む多様な人々が交差する空間であったこと、またその中で語り手の多様性のある経験が重要であることを明らかにしたい。

1945年8月、日本はポツダム宣言を受諾し、連合国による占領統治が始まった。これにより、日本は敗戦国として徹底的な政治・社会・文化の再編を迫られ、連合国軍総司令部（GHQ）の主導のもとで民主化政策が進められた。特に教育制度の改革はその中心的な柱の一つとされ、日本国憲法（1947年）や教育基本法の制定を通じて、戦前の国家主義的・軍国主義的な教育から、個人の尊重と民主主義の理念を基盤とする教育への転換が図られた（文部省 1947）。

このような体制変化の中で、日本政府は国家の自己像を「大日本帝国」「軍国日本」から「民主日本」「平和日本」へと再定義せざるを得なくなった²。この変化に伴い、戦後の日本教育にはアメリカ文化の影響が濃く反映されていくことになった。とりわけ、在日米軍基地内に設けられた学校においては、アメリカの教育制度や価値観が導入され、そこで育つ日本人の子どもたちは日常的にアメリカ文化に触れる機会を持つこととなった。これにより、彼らのアイデンティティ形成には多文化的な視点が含まれるようになった。

本稿では、山口県の岩国基地および東京都の立川基地という異なる地域における米軍基地で育った日本人の子供たちに着目する。彼らは他地域の子供たちとは異なり、米軍の駐留生活や訓練風景が日常に溶け込んだ環境で成長しており、その影響は彼らの学校生活、さらには作文や日記といった自己表現にまで反映されている。本研究の目的は、そうした子供たちがどのように自らのアイデンティティを形成してきたのかを明らかにすることである。

特に、岩国と立川という二つの米軍基地の周辺で育った子供たちの語りや記録を通じて、米軍基地の存在がどのように彼らの所属意識や生活感覚に影響を

及ぼしたのか、そして日本人としての自己理解がどのように揺さぶられ、あるいは形作られていったのかを探究していく。

キーワード

戦後教育、民主教育、米軍基地、岩国米軍基地、『基地の子』、立川米軍基地、『スナガワ』

2. 先行研究

1. 山口刀也「1950年代前半の岩国米軍基地と生活綴方-恩田操による学校文集『デルタ』編纂とその反響に着目して-」³

本論文は、1950年代前半の山口県岩国市・川下中学校における教師・恩田操の生活綴方教育の実践と、その成果である学校文集『デルタ』第3号に注目している。『デルタ』は米軍基地周辺の子どもや地域社会の生活を克明に描き、平和運動や「基地の子どもを守る」運動とも連動し、教育界や社会運動史で注目された。特に文集第3号は、生活綴方を通じた基地問題の記録として全国的に反響を呼び、後の『基地の子』刊行にも影響を与えた。著者は、こうした綴方教育の具体的実践とその意義を再評価し、戦後教育史における基地と教育の関係を考察している。ところが、この論文は、戦後基地で育てられた子供たちがどのような自己意識を形成したかを論考していない。本稿では、戦後子供たちが学校で与えられた課題の作文や日記を通じて、子供たちが基地問題とどのように向き合い、それが彼らの自己意識やアイデンティティ形成にどのような影響を与えたのかを考察したい。

2. 塚田修一「「基地の町」の戦後史と表象 一日米軍立川基地とその周辺―」⁴

この論文では、2017年に立川駅北口に設置された「立川小唄」の記念碑を題材に、立川の歴史的記憶の「選別」とその表象を考察している。記念碑は立川がかつて「空の都」と呼ばれた航空の街であったことを称えているが、その一

方で、戦後 32 年間にわたり「米軍基地の町」であったという重要な履歴が後景化されている点を問題としている。論文の関心は、記念碑によってどの歴史が忘れられているのか、つまり「米軍基地の町」としての立川の記憶がいかにして消されつつあるのか、に向けられている。

しかしながら、本論文では立川米軍基地の存在下で戦後を生きた子どもたちが、米軍による日常的な騒音や不当な行為のなかでいかに自己のアイデンティティを形成していったのかという点についての考察が欠落している。よって本稿では、立川基地周辺で育った子どもたちの生活経験に基づき、彼らのアイデンティティ形成過程を明らかにすることを目的とする。

3. 白岩伸也「戦後初期における旧軍関係教育機関出身者への施策 — 「非軍事化」と「民主化」の動向とその射程に着目して —」⁵

本論文では、陸海軍省・文部省・教育省などの政策主体の動向を辿りながら、戦後初期における旧国民教育政策の形成過程を明らかにし、「非軍事化」と「民主化」の関係性を検討している。これにより、日本の戦後教育政策が国家の民主化とどのように結びついていたのかが理解できる。

この先行研究を踏まえ、本研究では岩国米軍基地において「民主化」された教育を受けた日本人の子どもたちのアイデンティティ形成に焦点を当てる。岩国基地における教育政策の展開と、「民主化」の理念がどのように実践されていたのか、さらにそれが子どもたちの自己認識や価値観にどのような影響を与えたのかを明らかにしたい。

このようにして、以上の先行研究では、岩国米軍基地や立川米軍基地で育った子供たちの独自の教育や生活に関する検証は行われておらず、他地域の子供たちの教育状況との違いについても議論されていない。さらに、これらの子供たちが多様な影響を与えられた米軍基地との接近を通じて自己意識やアイデンティティ形成にどのような影響を受けたかについても、これまでの研究では明らかにされていない。この点を本研究の重要な要点として考察したい。

3. 問題提起

本稿において米軍基地の存在する地域で生活する子どもたちの「アイデンティティ形成」について論じるにあたり、まずは本研究で用いる「アイデンティティ」という概念について明確に定義しておく必要がある。Marcia (1966) は、アイデンティティの形成過程を「探索」と「関与」という二つの軸によって捉え、個人の状態を「達成」「モラトリアム」「早期完了」「拡散」という4つのステイタスに分類した。これにより、青年期における心理的な状態を客観的かつ体系的に把握する枠組みが提供され、アイデンティティとパーソナリティ、適応との関連性に関する実証的研究が大きく進展した⁶。

一方で、近年の研究動向をみると、個人のアイデンティティ形成がどのような社会的文脈の中でなされるかという点に対する関心が高まっている。たとえば、『Journal of Adolescence』誌では1996年に「文脈におけるアイデンティティ発達 (Identity Development in Context)」と題した特集号を組み、Phinney と Goossens (1996) が、理論的・実証的両面からこの課題に取り組む必要性を提起している⁷。実際のところ、今日においては世界的な規模で家族関係や社会構造、国家レベルの状況が急速に変化しており、こうした変化が個人のアイデンティティに及ぼす影響は無視できない。

本稿では、これら二つの異なるアイデンティティの捉え方、すなわち、個人内的プロセスに注目した Marcia のステイタス理論と、社会的・文化的文脈に注目した Phinney らの立場を踏まえつつ、米軍基地のある地域に生きる子どもたちの語りや体験にどちらの視点がより適しているかを、今後提示する研究課題への分析を通して明らかにしていく。

本研究では以下以下の問いを中心に論を展開する。

1. 基地内での教育や生活環境が、戦後民主教育の影響と相まって、彼らのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。
2. 彼らが抱く基地に対する肯定的あるいは否定的な感情が、どのように自己認識や所属意識に反映されているのかを分析する。

3. 岩国基地や立川基地という文化的接触の場において、彼らが日本文化と基地の文化の間でどのように折り合いをつけながら生活していたのか、その文化的調和のプロセスを探る。
4. 語り手の多様な背景や立場が、それぞれの経験やアイデンティティ理解にいかなる影響を与えているのかを考察する。

さらに本稿では、これまでの先行研究において十分に扱われてこなかった岩国基地および立川基地という二つの戦後米軍基地の事例に焦点を当てる。岩国において見られる〈a〉や〈b〉といった問題は、当該地域特有の現象として捉えるのではなく、立川基地周辺に暮らす子どもたちにも共通して見られる困難や葛藤である可能性がある。したがって、本稿の目的は、各基地における固有の問題の記述にとどまることなく、米軍基地という共通の歴史的・社会的条件のもとで、異なる地域に暮らす子どもたちがどのような精神的影響を受け、どのようにアイデンティティを形成していったのかを比較・検討することである。その過程を通して、米軍基地が子どもたちの発達や意識形成に与える影響の構造的かつ普遍的な側面を明らかにすることを目指す。

なお、本校の期間範囲は、以下の通りである。両米軍基地における問題提起を踏まえて、戦後直後の日米関係教育政策を捉えながら、1953年の『基地の子』や1955年から1957年までの『スナガワ』などという戦後の学生の作文集を参考にし、戦後の米軍基地で育った日本人の子供たちのアイデンティティ形成に関する研究を進める重要性がある。

4. 戦後の日米関係

戦後日本における対米関係は、政治・経済・文化にわたる多層的な依存と受容の過程として展開された。本章は、吉見俊哉の近著『親米と反米——戦後日本の政治的無意識⁸』を手がかりに、戦後日本社会がアメリカをどのように認識し、その存在をいかに自国の秩序の一部として取り込んできたのかを論じる。とりわけ、本書が提示する「快適さ」によるアメリカ受容の仮説、およびアメリカニズムの構造的二重性に注目しながら、戦後日本の政治的無意識におけるアメリカの位置を明らかにする。

4.1. アメリカ受容の構造

第二次世界大戦後の国際情勢の急激な変化により、その方針には大きな転換が生じる。1949 年の中華人民共和国の成立や 1950 年の朝鮮戦争の勃発といった出来事は、極東におけるアメリカの軍事戦略に直接的な影響を与えた。その結果、日本を非武装化・国家解体の方向へ導くという占領初期の方針は見直され、日本を極東の戦略的拠点として再構築する方針へと転換された⁹。

（海外）基地の設置は、単に軍事的・戦略的な合理性に基づいて選定されるだけではない。基地を受け入れる国との安全保障上の利害の一致、すなわち同盟関係の有無が重要な要因となる。仮にそのような関係が構築されていない場合には、基地設置国が受け入れ国に対して何らかの見返りを提供する「基地契約」などの形で調整が図られることもある。これらの要因（変数）とそれぞれの重みを体系的に整理し、具体的な事例と照らし合わせながら一般化を試みる事が求められる¹⁰。

このような視点から見ると、日本は米国との同盟関係を背景に、軍事的合理性のみならず、地域の安全保障環境における利害の共有という側面からも、アメリカの戦略的ニーズに応える重要な要因の一つであると位置づけられる。

また、（吉見：2007）は、日本が戦後一貫して親米的であり続けた理由を、「快適さ」という感覚に求めている。帝国日本がかつて東アジアに展開した植民地支配は、戦後、アメリカの軍事的・政治的支配へと転化されたが、日本はこの構造を能動的に受け入れ、アメリカの保護の下で副次的な地域的優位を享受するようになった。1950 年代から 70 年代にかけて、日本は他のアジア諸国とは異なり、民主主義と消費文化を基盤とした「非軍事国家」として経済成長を遂げ、アジアの経済的中心としての地位を確立する。こうした体制が国民に「快適な生活」として認識され、結果としてアメリカとの関係を積極的に支持する土壌を形成した。

一方の観点から、「アメリカニズム」を単なるアメリカ文化の模倣や移入とする立場を退け、国家としてのアメリカと、グローバルな規範としてのアメリカという二重の構造に着目する。この点においてアメリカは、単なる外国ではなく、ある種の「世界」そのものであり、他者でありながら自己の規範を定める参照枠として機能する。彼は、エドワード・サイードの「オリエンタリズム

ム」に倣い、アメリカを対象とした一種の「アメリカニズム」という視線の構造を提示している¹¹。また、戦後の日本がアメリカの支配的な影響（ヘゲモニー）に強くとらわれることになったのは、天皇制とアメリカ的価値観（アメリカニズム）がもともと対立していたからではない。実際には、両者は互いに対立するものではなく、むしろ補い合いながら共存できる関係にあったからである¹²と吉見が論じる。

1945年9月27日に撮影された裕仁天皇とダグラス・マッカーサーの写真は、戦後日本における日米関係の象徴的イメージとして流布された。この写真は、マッカーサーの威圧的な姿勢と天皇の小柄で緊張した態度を通じて、日本の敗北とアメリカの支配を視覚的に提示したとされる。しかし吉見は、この解釈が後年の再構成であり、当時の大衆が同様の感覚でこの写真を受け止めていたかについては疑問を呈している。むしろ、マッカーサーが意図的にメディア露出を控え、代わりに裕仁天皇を前面に出すことで、アメリカの支配を目立たせず浸透させたという点に注目すべきである。

4.2. 戦後の教育改革

戦後の教育改革は、国民主権に基づいた新しい教育体制の確立を目的としていた。これは、戦前の国家主義的・軍国主義的教育を否定し、教育行政の民主化、地方分権化、そして教育の自主性を尊重するという理念のもとに実施されたものである。こうした方針は、連合国、特にアメリカによる占領政策の一環として推進された。この占領政策の転換は、教育分野にも直接的な影響を及ぼした。1951年にマッカーサーが解任され、後任としてリッジウェイ中将が就任すると、日本政府には占領下の諸法令の再検討権限が委譲される。吉田茂首相は「政令諮問会議」を設置し、同年には対日平和条約および日米安全保障条約が締結された。こうした動きは、教育の民主化政策から中央集権的な体制への移行を示すものであった¹³。

その結果として、文部省の権限は強化され、政治主導型の教育政策が次第に展開されていく。特に戦前の内務省出身の政治家が文部大臣に就任するようになると、政治的な思惑が教育政策に大きく影響を及ぼすようになった。かつては文部省と協調関係にあった日本教職員組合（以下、日教組）との関係も悪化

し、平和教育や民主教育の在り方、教育の自律性や中立性を巡って、両者の対立が深まっていった。このような政治主導による教育政策の展開は、教育現場において多くの混乱と対立を生み出し、教育が政争の具とされるようになる。その結果、中央集権的かつ閉鎖的な教育行政が再編される方向へと進み、新たな教育問題が次々と生まれていくこととなった。この過程は、戦後日本の教育がいかにして政治と結びつき、その自律性と中立性を揺るがされていったかを示す一例である¹⁴。

戦後の教育民主化政策が進められる中、第二次アメリカ教育使節団の来日前までに、以下のような主要な教育政策や指令が発出された。

- 1 新日本建設ノ教育方針(文 部省、1945 年 9 月 15 日)
- 2 総司令部指令:日 本教育制度ニ対スル管理政策(1945 年 10 月 22 日)
- 3 総司令部指令:教 員及教育関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件(1945 年 10 月 30 日)
- 4 女子教育刷新要綱(閣 僚諒解、1945 年 12 月 4 日)
- 5 総司令部指令:国 家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ 関スル件(1945 年 12 月 15 日)
- 6 総司令部指令:修身、日本歴史及ビ地理停止ニ関スル件(1945 年 12 月 31 日)
- 7 アメリカ教育使節団報告書(1946 年 3 月 31 日)
- 8 新教育指針(文部省、1946 年 5 月 21 日)
- 9 教育刷新委員会第 1 回 建議:教育の理念及ビ教育基本法・学制・私立学校・教育行政(1946 年 12 月 27 日)
- 10 教育基本法・学校教育法の公布:(国 民学校令、中等学校令、師範教育令、大学令等 廃止、1947 年 3 月 31 日)
- 11 日本教育制度改革に関する極東委員会令(1947 年 4 月 11 日)
- 12 視学制度の廃止、指導主事の設置を都道府県に通告(文 部省、1947 年 11 月 11 日)
- 13 教育刷新委員会第 8 回 建議:第 1 回 建議中「学制に関する事」の追加(1947 年 12 月 8 日)
- 14 教育刷新委員会第 12 回建議:中 央教育行政機構に関する事(1948 年 2 月 7 日)
- 15 教育刷新委員会第 17 回建議:教 育行政に関する事(二)一 教育委員会制度の実施 について(1948 年 4 月 26 日)
- 16 衆議院:教 育勅語等排除に関する決議(1948 年 6 月 19 日)
- 17 参議院:教 育勅語等の失効各確認に関する決議(1948 年 6 月 19 日)

18 教育勅語等の取扱いについて(文 部省通達、1948 年 6 月 25 日)

19 教科書の発行に関する臨時措置法について(公布)(1948 年 7 月 10 日) ¹⁵

以上から、アメリカの軍事的・政治的支配のもと、日本は非軍事国家として経済発展を遂げ、民主主義と消費文化を享受し、それが国民にとっての安定と豊かさの源と認識された。こうして日本社会の中に、アメリカを他者でありながらも自己の秩序の一部とする「政治的無意識」が根付いていった。

戦後の教育改革は、国家主義的・軍国主義的な教育から脱却し、国民主権と個人の尊厳に基づく民主的教育の確立を目指したものである。国家神道や教育勅語の排除、修身・日本史・地理の停止などにより、従来の宗教的・神話的価値観から現実的かつ普遍的な倫理観への転換が図られた。この改革は、権威への服従を前提とした国民像から、自由・平等・平和を重視する自律した市民の育成を目指す新たな日本人像の形成につながった。

一方で、占領政策の転換や文部省の権限強化により、教育の中央集権化が進み、日教組との対立など教育の政治的中立性が揺らぐ状況も生まれた。こうした中で、戦後日本の教育もまた、アメリカとの関係を背景に、政治的力学に深く組み込まれ、日本人の精神やアイデンティティは、政治と教育の緊張関係のなかで再構築されていった。

5. 戦後の米軍基地の展開



(表1) 清水幾太郎[等]編『基地の子—この事実をどう考えたらよいか—』 光文社、(1953)の最後のページの表紙

吉見俊哉は、戦後におけるアメリカの軍事的展開に関する基本的構図を、「アメリカは基地の帝国である¹⁶⁾」との明快な表現で指摘する。すなわち、19世紀末に全盛期を迎えた西欧列強が植民地を基盤として帝国秩序を形成したのに対し、アメリカは世界各地に広がる基地という飛び地を結んでグローバルな覇権を維持してきたとし、軍事基地網の拡張こそがアメリカの覇権構造の中核を成してきたと¹⁷⁾論じる。とりわけ、第二次世界大戦後、アメリカは「『反共』をスローガンに掲げ、国家安全保障会議 (NSC) や国防総省、統合参謀本部、中央情報局 (CIA) などの軍事機構を次々に設立し、世界各地に広がる基地ネットワークを発展させていった¹⁸⁾」のである。これにより、アメリカは冷

戦という国際環境の下で、地球規模の軍事的展開を可能とする体制を整えていった。

冷戦初期、1952 年の時点で、日本本土には実に 733 か所もの米軍基地が存在しており、その総面積は約 14 万 5600 町歩に達していた。これは大阪府の広さに匹敵する規模である。さらに、軍用機の発着や米兵との接触など、基地の影響を直接的に受ける周辺地域まで含めると、その範囲は四国全体に相当する広さとなる。基地の用途別に見ると、演習場が全体の約 67%を占め、次いで飛行場が 13%、兵舎が 11%を占めていた。しかし、日本における米軍基地のより本質的な特徴は、これらの軍事施設が「戦中から戦後」へと連続的に存在してきた点にある。戦後に米軍基地となった多くの土地は、もともと旧日本軍が使用していた場所であり、地域社会との関係も戦前から続いているものが少なくない。実際、首都圏の主要な米軍基地、横須賀、厚木、座間、立川、横田、ジョンソン（入間）、朝霞などはいずれも旧日本軍の施設を転用したものであった（表 1 を参照）。たとえば、横須賀は戦前から佐世保や呉と並ぶ日本海軍の軍港（鎮守府）であり、座間には陸軍士官学校や海軍工廠が置かれていた。厚木基地は太平洋戦争中に日本海軍の防空拠点として整備されたものであった¹⁹。

立川基地は、大正時代に陸軍航空部隊の中心的拠点として建設され、戦争末期には多くの特攻隊員がここから出撃した。その附属施設として 1940 年に整備されたのが横田飛行場（旧称・多摩飛行場）である。また、ジョンソン基地は、かつての豊岡飛行場（陸軍航空士官学校などがあった）を転用したもので、現在では航空自衛隊の入間基地となっている。朝霞も、戦中には陸軍予科士官学校の練兵場として使われていた。このような軍事施設の転用は、千歳や三沢、佐世保など全国各地に共通して見られる。沖縄においても例外ではなく、たとえば現在の嘉手納基地は、もとは日本陸軍航空隊の飛行場であった²⁰。

こうした戦後アメリカの構造について、古矢旬は次のように総括している。「自由資本主義のもとで未曾有の豊かな社会を生みだしたこの国の戦後が、同時にいわば準戦時体制下にありつづけてきた²¹」のである。すなわち、経済的繁栄と軍事的動員体制とは対立的なものではなく、むしろアメリカ的秩序の両

輪として共存し、戦後世界秩序の形成において中心的役割を果たしてきたのである。

6. 岩国基地の歴史と地位

岩国基地は、世界に 7 ヶ所存在する海兵隊専用の航空基地の一つであり、沖縄（キャンプ瑞慶覧）に司令部を置く第 1 海兵航空団の作戦拠点として位置づけられている。同航空団の航空戦力を担う重要な基地として、岩国は、ノースカロライナ州のビューフォート、チェリーポイント、ニューリバー、カリフォルニア州のエルトロ、アリゾナ州のユマ、そして沖縄の普天間とともに、米海兵隊のグローバルな航空展開体制に組み込まれている²²。軍事評論家・前田哲男は、岩国基地の機能について、朝鮮半島に最も近接する日本本土から米海兵隊の軍事的存在感を示す、いわば“力の象徴”としての役割を担っていると指摘している。すなわち、岩国基地は、アジア太平洋地域における米軍の即応体制の中核を構成する拠点である²³。岩国基地が地政学のおよび軍事戦略上、アジア太平洋における米海兵隊の即応態勢の要であり、その象徴的機能と構造的役割を明確に示している。

岩国における米軍による植民地的支配が長期間続いた中で、市民はさまざまな形で闘いを繰り広げてきました。特に1950年代には、教師たちが父母と連携し、子どもたちをまっとうに育てるために奮闘した。この時期の抗議活動は、1950年の8・6平和斗争を起源としており、岸信介や佐藤栄作の地盤であった県東部において、広範な市民の支持を得つつ、米軍に対抗していく姿勢が見られた。市民たちは、米軍による抑圧や搾取、そして持ち込まれた退廃文化に対抗するために様々な手段を用いた。具体的には、教育現場での戦いが重要であった。教師たちは、子どもたちに民族の誇りや正しい倫理を教えることで、彼らが健全に成長し、地域社会に貢献できるよう努力した。この取り組みは、親や地域の支援を受けながら展開され、米軍の圧力や妨害にも屈せず進められた。このような教育における闘いは、岩国の地域社会において広く支持された。それは単なる教育の枠を超えて、文化やアイデンティティの保護、地域の自立と繁栄を目指す市民の意志を象徴していた。この時期の斗争は、岩国の歴史において重要な節目であり、市民の結集と団結がもたらす力を示すものとして記憶

されている²⁴。

6.1. 戦後の岩国基地を生きる子どもたちの眼差し

このような歴史的背景を踏まえ、本章では、岩国における地域コミュニティのなかで育つ子どもたちが、米軍基地の存在をいかに捉え、どのような困難や葛藤を経験しているのかを考察の対象とする。とりわけ、教育や家庭、地域社会といった生活環境が、子どもたちの基地問題へのまなざしにどのような影響を与えているのかを分析する。また、本章では、子どもたち自身が綴った文章や発した言葉を手がかりとして、彼らの視点に可能な限り接近することを試みる。そこには、大人の語りでは捉えきれない、基地をめぐる現実に対する子どもなりの理解や感受性が反映されており、岩国という場に生きる人々の記憶と抵抗の継承という観点からも重要な意味を持つと考えられる。

1. 野村秀夫「講和」岩国市川下中学校一年

「僕は、講和ということばがあまりわからない。人のいうのを聞いてみると、せんそうをむこうの国からせめて来ても、ふせぐのならよいことになるのだそうだ。だが、この岩国では、あまり変わったことはない。

僕の家なんか、「独立したんだから、よく勉強しなさいよ。」といわれる。また日本の国も一人だちしたのだから、お前も自分のことは自分でせえよ、といわれる。

全く独立したばかりに仕事が多くなるからいけない。兄がこんなことを言う。

「お前、独立独立とよく言うが、その意味がわかるのか。」

そこで、人から聞いた、うそかほんとうか、よく分からないことをいうと、「そんなことをいう。つまらん馬鹿じゃのう。」といわれる。

独立したからといって、米軍が帰るわけでもない。聞いてみると、朝鮮ゆきに都合がええからだそうだ。学校では先生に、作文を書け書

けとせきたてられるが、講和とはなにか、ひとつもわからないので、作文は書けない²⁵。」

この作文からは、戦後の岩国基地周辺で暮らす子どもが体験していた精神的困難や複雑な感情、そしてその中で揺れるアイデンティティの形成過程が読み取れる。

まず、「講和」という言葉が理解できないままに、大人たちから「独立したのだから自立せよ」と繰り返し言われる状況は、子どもにとって抽象的で難解な国家的出来事が、突然身近な生活の責任としてのしかかることを示している。さらに、兄との会話からは、知識や発言が否定されることで自信を失い、無力感を抱いている様子がうかがえる。これは、家庭内での言語化・理解が困難なまま、社会的・政治的責任を押し付けられている感覚を表しており、自我の確立に葛藤が生じていることを示している。

また、「独立しても米軍が帰らない」という事実に対する混乱や皮肉は、戦後日本の「形式的独立」と「実質的な従属状態」への疑問を子どもの視点から反映しており、基地がある町の現実と、語られる国家像との乖離が強く意識されていることがわかる。これは、地域の子どもたちが日常生活のなかで「国家」と「自分」をどうつなげて捉えるかに深い影響を与えている。

総じて、この文章は、戦後の「独立国家」としての再出発が、地方の子どもたちにとっては不透明で、精神的負荷と混乱を伴うものであったことを示し、政治的現実と個人の生活、特に次世代の心の形成との深い結びつきを教えてくれる。アイデンティティ形成において、子どもは大人の言葉や社会の語りから意味を探ろうとしながらも、そのギャップに苦しんでいたことがよくわかる。

2. 隅田 忠義「ジープと雲」岩国市川下中学校三年

朝早く一台のジープが通った

朝空に

日本の国の憂愁をのせた雲が

たった一つ 浮かんでいた

ぼくは思う
ジープと雲
ああ この道にジープあるかぎり
日本の憂愁を消さないだろう

日本の空を流れるすべての雲が
いつも平和な雲であるように
雲はいつまでも
しあわせな雲であるように
ぼくは願う²⁶

この詩「ジープと雲」は、岩国市の中学三年生である隅田忠義によって書かれたものであり、戦後日本の子どもが抱える感情と、彼らが見つめた日常の風景が詩的に表現されている。詩の冒頭で描かれる「ジープ」は、米軍基地の存在を象徴しており、単なる通行の光景ではなく、戦後の占領状態が日常生活に深く染み込んでいることを示す記号として機能している。

一方で、「日本の国の憂愁をのせた雲」という表現には、作者が感じる国家の痛みや不安、あるいは未来への不透明さが託されている。ここで雲は、単なる気象現象ではなく、心情や時代の空気を反映する媒介として詩の中に浮かぶ。特筆すべきは、この「雲」が「憂愁」を帯びつつも、「平和な雲」「しあわせな雲」へと変わってほしいという願いを託されている点である。これは、現状に対する批判や怒りではなく、あくまで静かな希望と祈りとして表現されており、中学生という年齢にふさわしい純粋さと繊細な美意識がにじんでいる。

このように、ジープと雲の対比は、「現実」と「理想」、「占領の象徴」と「希望の象徴」という構造を詩の中に作り出している。「ジープあるかぎり／日本の憂愁を消さないだろう」という句に見られるのは、単なる政治的主張ではなく、基地の存在が子どもの心にまで影を落としているという静かな事実認識であり、それこそが本詩の切実さと詩的深さを際立たせている。この詩は、戦後日本の地方都市に生きる子どもたちが、日常

の中でどのように基地と共存し、それにどう感情を寄せていたかを読み解く貴重な資料である。「雲」が空を自由に流れる存在として描かれる一方で、「ジープ」は地上に固定された権力の象徴として詩に登場する。この構造の中に、詩人である少年の「自由」への希求と「支配」への違和感、そして未来へのかすかな希望が込められているといえるだろう。

3. 笠井克己「バクダン」岩国市川下中学校1年

赤いぜにふなを釣りに行くと

バクダンが 山のように積んである。

あのバクダンも

いつか朝鮮でばくはつして

たくさんの人を殺してしまうのだ。

かわいそうな朝鮮人よ と

バクダンを見ながら考えた²⁷。

笠井克己の作文「バクダン」は、戦争が子どもの生活にいかに深刻な影響を与えているかを示す重要な資料である。表面的には「赤いぜにふなを釣りに行く」という子どもらしい遊びの描写がある一方で、その遊び場に「バクダンが山のように積んである」という現実が交錯している。この対比は、戦争の恐怖や危険が日常生活の身近な場に侵入し、子どもの生活環境そのものを変質させていることを象徴している。

さらに、「あのバクダンもいつか朝鮮でばくはつしてたくさんの人を殺してしまうのだ」と語ることで、子どもが戦争の破壊性や暴力の現実を理解し、その影響に心を痛めている様子がうかがえる。ここには、子どもらしい無邪気さが失われ、戦争の悲惨さに直面することで急速に精神的な成熟を余儀なくされるという切実な状況が浮かび上がる。

最後に「かわいそうな朝鮮人よ」との言葉は、遠くの被害者への共感と同情を示しており、単なる恐怖や無関心ではない人間的な感情が存在する

ことを示唆している。これにより、子どもが戦争の現実に関き込まれながらも、自己の人間性を保とうとする葛藤が表現されている。つまり、この作文は、戦争によって「子どもとしての無垢さや純粋さが失われる」という意味を内包し、子どもたちのアイデンティティ形成が戦争の影響で複雑化していることを示しているといえる。

以上、岩国の子どもたちの文集からは、戦後の米軍基地という特殊な社会環境が、子どもたちの精神世界や日常生活に深い影響を与えていることが明確に読み取れる。彼らは「独立」や「講和」といった国家的な出来事を十分に理解できないまま、大人からの期待や社会的責任を背負わされる一方で、基地の存在が生活の隅々にまで影を落としている現実と直面している。こうした状況は、子どもたちは子供なりの生活を不足し、子どもたちのアイデンティティ形成に複雑な葛藤や混乱をもたらし、無邪気な子ども時代が侵食される様子が浮き彫りになっている。

また、基地の象徴である「ジープ」や「爆弾」といった具体的なイメージを通じて、子どもたちは戦争の悲惨さや不安、そして将来への漠然とした希望を詩的かつ率直に表現している。これらの作品は、基地問題が単なる政治的・社会的課題にとどまらず、地域に暮らす次世代の精神的な成長やアイデンティティの形成に深くかかわっていることを示唆している。つまり、岩国の子どもたちの声は、基地の存在が彼らの生きる世界のリアルな一部であり、その影響を抜きにしては戦後社会の理解は成り立たないことを教えてくれている。

7. 立川は「基地の町」

（塚田修一:2019）は、戦後の神奈川県立川市の性格について次のように述べている。「戦後の立川は 1945 年から 1977 年まで、つまり「立川飛行場」としての期間よりも長い 32 年間にわたって「米軍基地」が所在しており、町の性格も「米軍基地」の存在によって規定されていた「基地の町」であった」とし、さらに「実際、この記念碑が建っているのは、戦後 32 年間にわたって米軍基地のメインゲートであった場所²⁸」であると記している。

戦後の立川市が米軍基地の影響で急速に「基地の町」と化した状況を描いていますが、女性に対する差別的な表現が含まれており、今日の視点では問題があります。社会的背景への配慮と多角的な視点が求められる。

「立川市は戦後しばらくの間は、好むと好まざるとを問わず、時流にしたがって所謂「基地の町」化の途をたどらざるを得なかった。米軍立川基地の周辺には米兵を相手に取引を営む特殊女性の姿が激増し、昼夜をわかたず米兵と市中を徘徊し、酒と女とジャズとに明け暮れていた²⁹」

7.1. 基地による生活環境の変化と子どもたちの精神的影響

1. 馬場常夫（タイトルなし）（立川市第一中学校3年）

今日は日曜日だ、どこかへ行こうと思っても、行くところがない。それはどこへ行っても、このような光景が見られるからだ。

私たちはこの悪い環境の中に禁止されていると考えられる。私たちは、何一つ悪いことはしてない。それなのに、それは私たちを追いかけてくる…….

児童憲法というものができたが、この立川では、全くそのようなものは通用しない³⁰。

この作文からは、戦後の基地周辺で暮らす子どもたちが抱えていた深刻な精神的ストレスと、抑圧感が鮮明に浮かび上がる。筆者の馬場常夫は、「どこへ行っても、このような光景が見られる」と述べているが、これは日常生活の至るところに米軍基地の存在が染み込んでおり、心を落ち着ける「安全な場所」や「日常の自由」が奪われていることを意味している。子どもたちが休日さえ「行くところがない」と感じるのは、物理的空間の制限に加え、精神的な逃げ場がないことを表している。

さらに、「私たちは何一つ悪いことはしていないのに、それ（＝監視や制限）は私たちを追いかけてくる」という言葉からは、子どもが本来享受すべき

自由や尊厳が、基地の存在によって侵害されていることへの深い無力感と憤りが伝わってくる。これは、戦後民主主義教育で教えられた「権利」や「自由」と、現実との乖離による精神的な分断を象徴している。とりわけ「児童憲法というものができたが、この立川では通用しない」という一文は、その象徴的な叫びである。子どもであっても、戦後の民主主義理念が掲げる「平等」や「権利」が、現実社会では実現されていないことをはっきりと見抜いており、占領の矛盾を鋭く批判している。

この作文は、戦後日本における基地問題が、単なる安全保障や外交の問題ではなく、子どもたちの心と日常にまで深く入り込み、アイデンティティの形成や価値観の理解に大きな影響を与えていたことを示す貴重な証言である。精神的抑圧、不条理な現実、そしてそれを認識する子どものまなざしは、戦後日本の民主主義の限界を鋭く問いかけている。

2. 斉藤妙子「赤ちゃんまで」東京都立川市梨崎小学校6年

私の家では、井戸の水を使っています。井戸の水は、いくらお洗濯をしても、嫌な匂いがして、洗濯をした気がしません。このあいだ、近所のおばあさんが来て、「うちの赤んぼうは、おしりがひどくただれて、毎日ヒーヒー、泣いてこまりますよ。」と、お母さんに話していました。ガソリンのまじった井戸水で、おしめを選択するからです。赤ちゃんのお尻は、ちょっとガソリンが残っていても、しげきされてただれてくるそうです。

井戸の水がくさいことは、はじめは富士見町だけ騒いでいましたが、今では立川中の井戸水にガソリンが染み込んでいます。それでご飯が炊けないので、給水車で水を配っていますが、朝と晩に一回ずつです。1件の家にバケツ二はいだけで、どこの家でもみんなこまってしまう³¹。

この作文では、戦後の立川に暮らす子どもが、米軍基地の存在によって生活環境に深刻な影響を受けていた実態が描かれている。井戸水にガソリンが混入し、洗濯物からは嫌な匂いが取れず、乳児の皮膚がただれるといった具体的な記述からは、生活インフラの破壊と、それが家族全体に及ぼす影響の大きさが

うかがえる。井戸水の汚染は一部の地域にとどまらず、「今では立川中の井戸水にガソリンが染み込んでいます」とあるように、地域全体に広がっていた。にもかかわらず、給水車による水の配給は1日に2回、1世帯あたりバケツ2杯という極めて限定的なものであり、住民の生活は著しく制限されていた。このような状況は、日々の基本的な生活行為である炊事や洗濯さえ困難にし、特に子育て中の家庭にとっては深刻な問題であった。

加えて、この作文からは、そうした過酷な環境に対して声を上げることもできず、ただ現実を受け入れ、耐え忍ぶしかない子どもの姿が浮かび上がる。生活の不自由さに対する不満や疑問を率直に表現しながらも、どこかあきらめにも似た感情がにじんでいる。このような環境は、子どもたちの精神面にも少なからぬ影響を与えていたと考えられる。

このように、米軍基地の存在は単に国家間の政治や安全保障の問題にとどまらず、基地の近隣に暮らす一般市民、特に子どもたちの生活と精神に直接的な影響を及ぼしていた。この作文は、その現実を生きた当事者の視点から記録した、貴重な証言といえるだろう。

（柳沢、1955）は、砂川中学校の生徒による作文の内容を分析する中で、当初の自身の予想に反して、基地拡張に対して賛成の意見がほとんど見られなかったことに驚きを示している。彼は、農家・非農家といった家庭の職業的背景によって意見が分かれる可能性を想定していたが、実際にはごく少数の中立的立場を除いて、すべての作文が拡張に反対の立場を明確に示していたのである。しかも、その反対意見は、単なる反対というにとどまらず、「相当激しいことば」によって表現されていた。

この観察は、当時の砂川中学生たちが家庭環境の違いを越えて、共通して基地拡張に対する強い批判的態度を有していたことを示している。柳沢が指摘するように、拡張反対の意見が広範な層に及んでいたという点は、地域社会全体における抵抗の広がりを理解する上で重要な示唆を与えるものである³²。

「米軍は進駐して間もなく滑走路の建設にかかった。その時は無断で砂川の農民の土地へブルドーザーを乗り入れて、農民の耕作した麦畠

が一晩のうちに滑走路となった。(中略)こうして米軍は、旧陸軍とは違い、滑走路をつくと同時に、基地全体に柵を施して日本人と基地とを隔離してしまう。基地内は柵を距てた異国である。ゲート・ボックスには青い目をした白人と真っ黒な黒人が哨兵として立ち、基地の周辺を走る車は全部外車であり、横文字はまるで外国へ来た感じがする。(中略)飛行機の発着回数は非常に多く、爆音と爆風に砂川の住民の悩みがはじまった³³⁾

以上の引用からは、戦後の米軍基地が日本人のアイデンティティ形成に与えた影響として、強い疎外感と「異国性」の認識があったことが把握できる。農地の接収や柵による隔離は、日本人を自国の中で「他者」と向き合わせ、米軍基地を象徴とするアメリカの存在が日常に侵入することで、自らの文化的立場を意識せざるを得なくなった。その結果、基地周辺の日本人は「日本人とは何か」という自己認識を、支配的な他者との対比の中で再構築する必要に迫られた。

7. 2. 砂川闘争と文集『スナガワ』



(表2) 砂川中学校教師編 文集『スナガワ』第3号、1975年

砂川中学校の教員たちは、教室内で生徒との対話や学びの中から浮かび上がった「基地拡張問題」に主体的に向き合うべく、教員サークルを結成した。彼らは、その活動の一環として高橋氏との座談会にも参加しながら、北多摩地域

をはじめ、東京都内および全国規模の教育研究集会において実践報告を行っていった。こうした実践の積み重ねの中から誕生したのが、文集『スナガワ』³⁴である。「基地と教育」研究サークルに所属する教員たちによって実践された活動の一つに、文集の編集・発行がある。1955年から1957年にかけて、計3冊の文集『スナガワ』が刊行され（表2を参照）、延べ83名の生徒による143篇の作文が収録された。これらの作文は、砂川闘争のさなかに生徒たちが自ら体験し、目撃し、あるいは感じ考えたことを綴ったものであり、「雑多な内容と複雑な構造をもつ」独自の歴史資料として位置づけられる³⁵。文集『スナガワ』を利用して、生徒の作文から、地元中学生にとっての「基地拡張問題」と「反対運動」がどのような経験として生きられ、それでどのようなアイデンティティ形成が予想されるかを以下に考察する。

7.3. 『スナガワ』と教育実践：声をあげることの意味

（高原、2022）は、砂川中学校の生徒たちが基地拡張に反対する根拠として挙げた「爆音」は、単なる環境被害の域を超え、生活や学習、将来の進路、さらには歴史的記憶にまで深く関わるものであったと説く。文集「スナガワ」に収録された作文のうち約6割が爆音被害に言及しており、この騒音は彼らの心的態度や問題意識を形成する核として機能していた。

具体的には、第一に、家庭内での会話や睡眠、日常生活への支障が強調され、生活環境が脅かされていることへの不安が表明された。第二に、授業中の聞き取り困難や集中力の低下など、学校生活への直接的影響が指摘されており、学習権の侵害として問題化されている。第三に、中学生という進路選択の時期にあって、騒音が勉強への障害となり、将来への希望を阻むものとして認識されていた。第四に、爆音が戦争や占領時代の記憶と結びつけられ、再び戦争に巻き込まれるのではないかという歴史的・予兆的な恐怖を呼び起こしていた³⁶。

このように「騒音と基地拡張問題」は、子どもたちの身体感覚と生活実感に根ざした経験としてとらえられ、それゆえに反対の声は親の職業や家庭の経済状況を超えて共有されていた。これは、騒音が単なる環境問題ではなく、戦後

日本における基地問題と子どもたちのアイデンティティ形成、さらには未来に対する倫理的態度の形成に深く関わっていたことを示している。

1968 年 12 月、アメリカ空軍の司令官は立川基地における滑走路の拡張計画を取りやめると表明し、その翌年の 1969 年 11 月には、立川基地から飛行部隊を撤退させる方針が明らかにされた。さらに同年 12 月には、基地に所属していた部隊の解散式が実施された。そして 1972 年には、立川基地の様子は以下のように記録されている。「いま、580 万平方メートルにおよぶ立川基地は、しーんと静まりかえっています。かつて、3 分おきに飛びたった軍用機も姿を消し、耳を聳する爆音も聞こえなくなりました」³⁷。かつての喧騒が消え、基地の静寂が戦後の転換点を象徴している。

砂川の中学生たちは、基地拡張に対して共通して「反対」の立場を作文の中で表明していた。現地での測量が行われる以前から、彼らの問題意識の中心には、米軍機が発する爆音の存在があった。ただし、その「音」の受け止め方は生徒一人ひとりの視点や経験によって異なっていた。この点を踏まえたうえで、本節の最後に考察すべきなのは、そうした爆音に対して中学生たちがどのような心理的態度を抱いていたのかという点である。

1. 野崎節子(砂川中学 1 年生)

「学校へいくとちゅうでひこうきがとうる」と「私たちはかばんをおいて耳をふさいで通ってしまうまでまっています」と、通学路という過程と学校の 2 つの生活現実が交差する場での被害を述べ、「これはがまんが出来ません」と記述した³⁸。

この学生の文から、子どもたちにとって通学路は本来、安全で穏やかな日常の一部であるはずであることが言える。しかし、爆音によってその空間は脅かされ、「耳をふさいで待つ」という行動に現れるように、身体的にも精神的にも強い負荷を受けている。「これはがまんが出来ません」という言葉には、単なる不快感を超えた、生徒たちの切実な叫びと、日常の平穏が奪われている現実への強い訴えが込められている。

2. 池和田利子(砂川中学中学 1 年生)

私達の学校は飛行場のそばにあるので、毎日飛行機のエンジンの音になやまされています。教室での授業は飛行機のアがる時は、先生も話をやめなければなりません。まして国語の授業に友達が本を読んでいるのも、よく聞きとれません。先生が「そのつぎを読んでもいいな。」と言われた時などほんとうにどこを読んでもいいのか、こまっています。

小さいころから、私達は飛行機の音には、なれっこになっていますから飛行機が空を飛んでいてもそう気にしません。でも初めて中学校に入学した時、こんなにうるさくて、よく上級生の人勉強出来るなあーと、ふしぎに思ったくらい飛行機が上がる時の音はやかましくて、なんと言ってもいいかわかりません。...今でも教室の、窓越しに飛行機の離発着が見えるのですから、それがもし拡張されたら私達は今以上のさわがしい音に苦しまなければなりません³⁹。

この文章を分析すると、飛行場のそばにある学校で育った学生たちは、飛行機の騒音が日常生活の一部となっていることがわかる。飛行機のエンジン音は授業の妨げとなり、先生や友達の声が聞き取りにくいという具体的な困難が描かれている。しかし一方で、彼らは小さいころからその騒音に慣れており、飛行機の音があっても気にしない「なれっこ」になっていると述べている。

このことから、騒音問題は単なる環境の問題を超えて、彼らの学校生活や成長過程の重要な背景の一つ、つまり彼らの「アイデンティティ」の一部になっていると考えられる。騒音という外的な環境要因が、学生たちの経験や感覚に深く根付いており、その影響を受けながらも彼らは日々の生活を送っているのである。特に、中学校に入学したばかりの時の驚きや困惑、そしてそれを受け入れていく過程も、彼らの自己形成に影響を与えているといえる。

つまり、騒音問題は彼らにとって単なる不快な音以上の意味を持ち、「学校生活の環境」として、彼らのアイデンティティの一部となっているのである。

本章では、文集『スナガワ』に収録された子どもたちの作文を手がかりに、戦後の立川・砂川地域において、米軍基地という過酷な現実と向き合いながら彼らは何を感じ、いかに語り、自己を形成していったのかを考察した。爆音や事故への不安、平和への願い、日常の中に入り込む非日常—そうした経験の一つひとつが作文として綴られた言葉の中に凝縮されており、子どもたちはその語りを通して、自らの位置を見つけ出そうとしていた。

それらの語りは、単なる生活の描写ではなく、「自分はなぜここにいるのか」「何を感じているのか」といった内的問いへの応答でもあり、自己理解と他者との関係性を深める過程、すなわちアイデンティティの形成の証でもあった。この過程は、教師による丁寧な読み取りと作文指導、そして地域社会とのつながりを意識した教育実践によって支えられていた。

文集『スナガワ』は、子どもたちの内面の声をすくい上げると同時に、それを他者へと開いていく媒介となり、子どもが社会の中で「語る主体」として立ち上がっていく場であった。彼らは、基地の存在によって規定された自らの生活世界を描く中で、「基地のある町の子」としての自覚や立場を言葉によってかたちづくっていたのである。

8. おわりに

8.1. 成果と独創性

本稿では、岩国と立川という二つの米軍基地所在地域における子どもたちの語りを手がかりに、基地という軍事的・政治的装置が、子どものアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしてきたのかを比較検討してきた。その結果、基地の存在は単なる空間的な背景にとどまらず、子どもたちの日常生活や精神世界に深く浸透し、その語りや表現を通じて、自己理解と社会との関係形成に大きな意味を持っていたことが明らかになった。

本研究の独創性は、以下の三つに指摘できる。

第一に、従来の基地研究が地政学的・法制度的アプローチに偏りがちであったのに対して、子どもの作文や詩といった一次資料に注目し、基地問題を「教育」および「子どもの語り」という視角から読み直した点にある。子どもの表現を分析の起点とすることで、基地がどのように経験され、言語化されてきたのかというミクロな視点からの再定位を試みたことは、これまで見落とされてきた生活世界のリアリティを浮かび上がらせるものである。

第二に、特に立川・砂川地域における教育実践の事例を通じて、子どもたちが基地をめぐる葛藤を単に受け入れるのではなく、それを言葉にし、誰かに伝えようとするプロセスに注目した点に革新性がある。『スナガワ』に見られるような作文表現は、爆音や事故への不安、平和への希求、日常に潜む異常性といった感覚を媒介としつつ、「自分はなぜここにいるのか」「どう生きるのか」といった根源的な問いを形にする試みであった。そこには、教師や地域との対話的な関係性を通じて、子どもが「語る主体」として成長していく土壌が確かに存在していた。

第三に、Phinney と Goossens (1996) による「アイデンティティは個人と社会との相互作用の中で構築される」という理論的枠組みに基づき、アイデンティティの構築が文化的・歴史的な文脈に依存する社会的過程であることを、岩国と立川という具体的な地域に根ざした実証的な事例から明らかにした点に本研究の理論的貢献がある。とりわけ、岩国の子どもたちは、戦後の「講和」や「独立」など国家レベルの変化に翻弄されつつも、米軍ジープや爆撃機といった戦争の象徴を日常の一部として受け入れながら、恐怖や混乱、不安を内面化し、時に詩的な形で表現することで、自らの存在を模索していた。一方、立川の子どもたちは、教育的枠組みの中でより社会的な視座を獲得し、「語ること」を通じて自己と他者との関係を構築しようとしていた。

注目すべきは、両地域の子どもたちが、爆音や事故、政治的緊張といった深刻な課題を抱えながらも、それらを言葉にして語るという行為を通じて、自己の内面を見つめ、社会との関係を模索していた点である。これは、単なる被害者としての受動的な姿勢ではなく、困難な状況の中にあっても他者と自己を調和させようとする柔軟な力、すなわち調和的なアイデンティティを育む過程であった。特に岩国では、より個人的で詩的な内面世界の表現が目立ち、立川で

は、社会に向けて語ろうとする主体性が育まれていた。こうした差異は、教育実践の有無や地域社会との関係性の違いによって形成されたものであり、それぞれの子どもたちが自らの語りを通じて「基地のある町に生きる子ども」という自己像を構築していたことを示している。

このように見てくると、子どもたちの語りは、単なる感情の吐露ではなく、教育や社会、そして歴史と接続する実践である。それは、戦後日本という特異な政治的・社会的状況のなかで見落とされてきた子どもたちの経験に光をあて、それを再解釈する手がかりを与えてくれるものである。強い気持ちをもって綴られた語りの数々は、自己の位置を模索する行為そのものであり、語ることによって自己をかたちづくろうとする姿は、まさに「社会的文脈におけるアイデンティティの発達」を体現している。

そして最後に、こうした子どもたちの語りから私たちが学ぶべきことは、「語られなかった声」をいかにすくい上げ、社会の中に位置づけるかという倫理的課題でもある。岩国と立川の事例は、基地という強固な装置が子どもの精神世界とどのように交差しうるかを示すと同時に、教育や社会のあり方を再考するための重要な契機となりうる貴重な証言である。

8.2. アラブ世界における有用性と意義

アラブ人である私は本研究のアラブ世界での有用性を見出して以下の通り提案してみる。本稿が扱う日本の米軍基地周辺における子どもたちのアイデンティティ形成の分析は、占領や駐留軍の存在が子どもたちの精神形成・所属意識にどのような影響を与えるのかを考察するための有効な枠組みを提供している。これは、現在もガザ、スーダン、イエメンなど占領や内戦状態が続くアラブ世界の地域における子どもたちの心理や社会的自己認識を考察する上でも重要な示唆を与える。

占領や紛争の影響を受けるアラブ世界の子どもたちは、日常生活の中で絶えず暴力や抑圧にさらされている。爆撃音、破壊された街並み、家族の死傷、学校生活の崩壊といった現実、彼らの心に深い恐怖や不安を刻み込んでいる。しかし、その一方で、こうした極限状況の中でも子どもたちは自分が「なぜこ

のような境遇に置かれているのか」という問いと向き合わざるを得ない。この過程はまさにアイデンティティ形成の根幹であり、それは決して個人の内面だけで完結するものではない。

紛争や占領という社会的・政治的な背景が、子どもたちの自己認識に深く影を落としている。特にガザやイエメンやシリアの子どもたちは、「敵」と「味方」が複雑に交錯する政治状況の中で、自らの立場や存在理由を模索し続けている。とりわけ大人たちからは「民族の未来を担う存在」として期待され、その期待と現実のギャップが子どもたちの内面に葛藤を生じさせる。

こうした中で、語りや表現の場が与えられることの意義は極めて大きい。子どもたちが自らの体験や感じていることを言葉にすることは、単なる心の整理ではなく、「私は何を思い、どこへ向かおうとしているのか」という根源的な問いへの応答になる。そしてこの過程を通じて、子どもたちは単なる被害者ではなく、自らの経験を社会の中で意味づけようとする主体的な存在へと成長していく。

現在、戦争があるアラブ諸国において教育や表現の自由が制限されている状況にあり、こうした語りの機会が奪われがちである。しかし、だからこそ教育的な支援や対話の場の確保が急務であり、それこそが子どもたちのアイデンティティ形成を支える鍵となる。

アラブ世界の占領下にある国の子どもたちの語りは、これまで政治や歴史の「周縁」に追いやられてきた経験を、社会の中心に据え直す営みとなりうる。それは、未来に向けて「どう生きるのか」「どのような社会を築きたいのか」という問いに対する、子どもたち自身の主体的な応答でもある。そこに本研究のアラブ世界への重要性と有効性があると示唆できる。

そして今後の課題として注目すべきは、アラブ世界における被害地域で暮らす子どもたちが、戦後日本の米軍基地のもとで生きた子どもたちの語りや経験に学びながら、自らの文脈に即したアイデンティティをいかに形成しうるかという点である。基地や占領という外的強制の中で、子どもがいかに語り、自己を構築し、社会と関係を結んでいくのか。そうした問いを、歴史的比較の視点からより多角的に検討していくことが、今後の実証的研究の重要な一步となろう。

■注

¹立川米軍基地は、1977 年 11 月末に全面返還されるまでアメリカ軍の基地として使用されており、その機能は順次横田基地へ移転されました。現在では、一部が自衛隊のヘリコプター基地や東京都・国の施設として利用されているほか、大部分は公園として活用されています。本稿は 50 年代の立川基地を対象とします。

² 白岩伸也「戦後初期における旧軍関係教育機関出身者への施策 — 「非軍事化」と「民主化」の動向とその射程に着目して —」、日本教育行政学会年報 45 号、2017 年、p.45

³ 山口刀 也「1950 年代前半の岩国米軍基地と生活綴方-恩田操による学校文集『デルタ』編纂とその反響に着目して-」教育史学会、2018 年、pp.19-31.

⁴ 塚田修一「「基地の町」の戦後史と表象 — 日米軍立川基地とその周辺 —」紀要社会学・社会情報学 第 29 号 2019 年 2 月、p.137-147.

⁵ 白岩伸也 「戦後初期における旧軍関係教育機関出身者への施策 — 「非軍事化」と「民主化」の動向とその射程に着目して —」日本の教育史学 60、2017 年 10 月、p.45-57.

⁶ 杉村和美「青年期におけるアイデンティティの形成関係性の観点からのとらえ直し」発達心理学研究第 9 巻、第 1 号、4、1998、p.45.

⁷ 前掲書、p.45.

⁸ 吉見俊哉の近著『親米と反米——戦後日本の政治的無意識』岩波書店、2007 年

⁹ 堀切勝之「戦後の教育行政再編成に伴う教育政策と歴史事情に関する一考察 — 教育民主化政策から中央集権体制移行期の教育政策の陥穽 —」、近畿大学教育論叢、第 21 巻第 2 号、2010 年 2 月、p.1.

¹⁰ 川名晋史『基地の政治学-戦後米国の海外基地拡大政策の起源』白桃書房、2012 年.

¹¹ 吉見俊哉「親米と反米——戦後日本の政治的無意識とアジア」講演 AJ フォーラム学会、2007 年 7 月、p.124.

- ¹² 吉見俊哉著『親米と反米——戦後日本の政治的無意識』岩波書店、2007 年、p.60.
- ¹³ 堀切勝之「戦後の教育行政再編成に伴う教育政策と歴史事情に関する一考察——教育民主化政策から中央集権体制移行期の教育政策の陥穽——」、近畿大学教育論叢、第 21 巻第 2 号、2010 年 2 月、p.1-2.
- ¹⁴ 前掲書、p.1-2.
- ¹⁵ 後宗臣 編『資料戦後20年 史(5)』日本評論社、1970年、p.2-20.
- ¹⁶ 吉見俊哉著『親米と反米——戦後日本の政治的無意識』岩波書店、2007 年、p.116.
- ¹⁷ 前掲書、p.116.
- ¹⁸ 前掲書、116.
- ¹⁹ 前掲書、116-118.
- ²⁰ 前掲書、116-118.
- ²¹ 古矢旬『アメリカニズム』東京大学出版会、2002
- ²² 梅林宏道『情報公開法でとらえた在日米軍』高文研、1992 年、p.253-254.
- ²³ 池田慎太郎「日米同盟と地方政治-岩国基地問題を事例として」広島市立大学国際学部『広島国際研究』14 号、2008 年、p.2.
- ²⁴ 長周新聞「基地の街から突破した教育運動 岩国の教育巡る歴史的経験」2014 年 9 月 19 日 <https://www.chosyu-journal.jp/kyoikubunka/3044> (閲覧日 2022 年 12 月 15 日 13:30)
- ²⁵ 清水幾太郎[等]編『基地の子—この事実をどう考えたらよいか—』光文社、1953 年、p.46-47.
- ²⁶ 前掲書、p.116.
- ²⁷ 前掲書、p.321.
- ²⁸ 塚田修一「「基地の町」の戦後史と表象—在日米軍立川基地とその周辺—」紀要社会学・社会情報学 第 29 号 2019 年 2 月、p.138.
- ²⁹ 前掲書、p.138.
- ³⁰ 清水幾太郎[等]編『基地の子—この事実をどう考えたらよいか—』光文社、1953 年、p.236.

- ³¹ 清水幾太郎[等]編『基地の子—この事実をどう考えたらよいか—』 光文社、1953 年、p.283.
- ³² 前掲書、107-108.
- ³³ 宮岡正雄『砂川闘争の記録』、三一書房、1970 年、p.37.
- ³⁴ 高原太一『米軍立川基地拡張反対運動の再検討——「流血の砂川」から多面体の歴史像へ——』、東京外国語大学大学院博士論文、2022 年、p.65.
- ³⁵ 宮岡正雄『砂川闘争の記録』、三一書房、1970 年、p.104.
- ³⁶ 高原太一『米軍立川基地拡張反対運動の再検討——「流血の砂川」から多面体の歴史像へ——』、東京外国語大学大学院博士論文、2022 年、107-109.
- ³⁷ 立川市、『立川基地』、1972 年、p.20.
- ³⁸ 野崎節子「その三」、教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル(編)『文集「スナガワ」第一集(謄写版)』、1955 年、p.7.
- ³⁹ 池和田利子「その一」、教職員組合砂川中分会「基地と教育」研究サークル(編)『文集「スナガワ」第一集(謄写版)』、1955 年、p.21-22.

■参考・引用文献一覧

❖ 一次資料

清水幾太郎[等]編『基地の子—この事実をどう考えたらよいか—』 光文社、1953 年

教職員組合砂川中分会基地と教育研究サークル編『文しゅう「スナガワ」』第 3 号、1957 年

❖ 二次資料

朝井志歩「環境社会学による軍事環境問題研究—岩国基地への空母艦載機移駐問題の事例から—」 観光社会学研究 25 号、2019 年

池田慎太郎「日米同盟と地方政治-岩国基地問題を事例として」 広島市立大学国際学部『広島国際研究』14 号、2008 年

石井光太『浮浪児 1945:戦争が生んだ子供たち』新潮社、2014 年

白岩伸也「戦後初期における旧軍関係教育機関出身者への施策 ―「非軍事化」と「民主化」の動向とその射程に着目して ―」、日本教育行政学会年報(45)、2017 年

ジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』岩波書店、2000 年

杉村和美「青年期におけるアイデンティティの形成関係性の観点からのとらえ直し」発達心理学研究第 9 巻、第 1 号、4、1998

高原太一『米軍立川基地拡張反対運動の再検討――「流血の砂川」から多面体の歴史像へ――』、東京外国語大学大学院博士論文、2022 年

塚田修一「「基地の町」の戦後史と表象 ―在日米軍立川基地とその周辺―」紀要社会学・社会情報学 第 29 号 2019 年 2 月

林 泉忠「沖縄県公文書館講座「沖縄アイデンティティとは何かⅡ」」 沖縄県公文書館講堂 2008 年 7 月

布川玲子、新原昭治編著『砂川事件と田中最高裁長官―米解禁文書が明らかにした日本の司法』、日本評論社、2013

堀切勝之 「戦後の教育行政再編成に伴う教育政策と 歴史事情に関する一考察―教育民主化政策から中央集権体制移行期の教育政策の陥穽―」、近畿大学教育論叢、第 21 巻第 2 号、2010 年 2 月

山口刀也 「1950 年代前半の岩国米軍基地と生活綴方―恩田操による学校文集『デルタ』編纂とその反響に着目して―」、日本の教育史学：教育史学会紀要 61 巻、2018 年

山里 絹子 「米軍基地で育った「沖縄系アメリカ人」のアイデンティティ形成とディアスポラ経験」、科研費、2022 年

吉見俊哉『親米と反米：戦後日本の政治的無意識』岩波書店、2007 年

吉岡光則 「岩国基地の「侵略力」の格段の強化と矛盾の激化」、日本科学者、第 54 巻 5 号、2019 年